俺と母と愛人と

俺が実家を出たのは、母親との関係からだった。
仲が悪いんじゃない、むしろ逆だ。それが男女の関係にまで発展したのがいけなかった。

今思い返してもどうしてそうなったのかは、良くわからない。
とにかくやりたいときにその欲望を受け止めてくれる存在が身近にいたということが大きな間違いだった。

もちろん普通の所帯じみた母親だったらそんな気にはなっていないと思う。女を感じさせるエロい雰囲気を持っていた。オカズにするだけではなく結局、現実の行動にも出てしまった。

俺は母親の身体を知ってしまってからは、毎日のように肉体を求めた。母親もいつの間にか、母としてではなく女として相手をしてくれるようになった。

母親もまた性に飢えていたのかも知れない。

だがさすがにこのままではまずいと思った俺たちは、俺が実家を出て一人暮らしすることでなんとかこの関係を終わらせようとした。

この辺の感覚は普通だったからだ。もともと近〇相姦を望んでいたわけではない。
そして一人暮らしをしているところへ、突然、母親がやってきた。

「ご、ゴメンナサイ。いきなり来てしまって……」

母親はすごく困った顔をしていた。居場所がないという感じだった。俺の部屋はワンルームの狭い部屋だった。その部屋に見たこともない熟女と呼べる年齢の女、それもエロい女と一緒にいるのだ。

別の部屋に隠れるわけにも行かず、確かにお互い身の置き所がない。

当然と言えば当然だろう。下着姿でいるのだからなにをこれからなにをしようとしていたのかはすぐに分かる。母親には鍵を渡してあるので俺がいないと思って入ってきたようだ。

どんなに鈍感な女でも俺たちの関係はだいたい察しがつくだろう。付き合ってるというか、セフレという関係だった。

「と、トンデモございません。こちらこそ申し訳ありません」

女の名前はイイモリナオコといった。深々と頭を下げて謝っている。それもお互いに正座してだ。ナオコはかなり狼狽していた。

とにかくあたふた服を身に着けると、ナオコは部屋から慌てて出て行った。妙なもので俺は特別慌てることもなく、平然としていられた。

「連絡してくれれば迎えに行ったのに」

「うん、ちょっと近くに来る用事があったから、ついでにと思ったのよ」

「あのさ、さっきの女とは別に深い仲って訳じゃないんだ。セフレって感じの、そんな体だけの付き合いなんだよ」

「…そう…。そうなの……」

母親はとても複雑な表情をしていた。
そして黙ってしまった。息子が付き合っていた女が自分とたいして年が離れていないことに驚いていたようだ。

それも単に驚くのではなく、いろいろと複雑な想いが交錯しているが見てとれ。

当然だろうなとも思う。
俺は女がかえった後で詳しく話して聞かせた。今までの経緯を。

「まあ若い女の子とも付き合ったことがない訳じゃないんだけども、どうも年上の女に慣れてしまっているみたいなんだよ。さっきのあのひとも俺とカアチャンのことを話したことがあって、それから付き合うようになったんだ」

「うん……」

「やらせてくれるって言うんだよ。さっきの女、見たとおりの好き者でね。性欲が強くて困っていたらしいんだ。お互いにちょうど良い相手だったって訳さ」

「……そう」

「はっきりいってさ、俺は熟女でないと興奮しなくなっているみた

いなんだ……。同い年の女の子とも付き合ってみたんだけどどう長続きしなかった」

「……」

「今日は、さっきの女とやるつもりだったんだ。若い女と違ってあまり体裁を気にしなくても良いんだ。ホテルだとか利用するよりも部屋でやることが殆どなんだ」

俺はそういって、母親に手を伸ばした。

母親はその手から逃れようともしなかったし、嫌がもしなかった。
俺は少し興奮していた。帰った女とはまだなにもしていなかったのもあるし、一年ぶりの母親の身体に興味が移っていた。

久しぶりに見る母親の姿に、懐かしい母の姿と性の快楽を与えてくれる女としての母の顔が重なった。自分でも気が付かなかったが、俺は母親の肉体に飢えていたようだ。

俺は話し続けた。そうしながさらに母の肉体に触れていった。
言い訳のようでもあり、話すことで一年の空白を埋めようとしているようでもあった。

「ごめんなさい……」

「あやまることなんかないよ。俺だって悪いんだ。したくてたまらなかったんだよ……」

まるで母と初めてしたときの再現のような気がした。
気持ちが上擦っている。新鮮な欲望が蘇ってくる。
ナオコがさっきまでこの部屋にいたことが、気持ちをさらに高めている気がした。

服の上から乳房に触れて、懐かしい感触だった。
大きくて柔らかい心地良い感触だった。

歳のわりには形の良い乳房だ。その乳房に俺は何度もむしゃぶりついていたのだ。実家での母親との情事の情景が蘇ってくる。

初めは眠っている母親の大きな乳房を悪戯したのが始まりだった。とにかくやりたかった。マスターベーションのオカズのつもりだった。

それが男と女の関係に発展してしまうなんて――。

「うっ…ン……」

嫌がらなかった。むしろ自分から身体を預けてきた。
母親もまた、気持ちが疼いている。乳房を握ると熱い吐息を漏らしている。

すでに母親ではなく、女の顔になっていた。

「チュッ……ンン……」

自然と唇が重なった。母親が顔をかたむけたからだ。
唇と唇が触れると同時に俺は強引なほど激しく、唇で舌で擦りつけるようにキスをした。

母親もすぐに応えてきた。
欲していたのは母も同じなのが、唇や舌を通して伝わってきた。

初めはしっかりと、確かめるように、すぐに飢えたようにお互いの舌が絡み合った。

一度激しさが加わると後はセーブが効かなかった。
俺はすぐに母親を押し倒す。押し倒されても抵抗しなかった。
むしろ待ち望んでいたかのようだった。手が俺の背中に廻ってきた。

「…あ、……ああ……」

すぐ喘ぎだした。
服を脱がしたのか脱いだのか分からない。
剥き出しになった乳房が眩しかった。乳首に吸い付いた。

「あっ…うっ……」

乳首を吸われただけで、母親は頭を仰け反らせている。
敏感になっていた。お互いに身体を抱き合うように、ベッドにもつれ込んでいった。

「ハア…、ハア、ハァ〜〜……」

あまり話しかけなかった。
　そんな余裕がなかったからだ。一年も母親とは関係がなかった。それがこんなにも突き上げてくるような欲望を感じさせるものか。

股間がはち切れんばかりに強ばっている。
ジンジンと痛いくらいに硬くなっていた。触れられただけで
射精しそうだった。

「したかっただよ。カアチャンのマ〇コに入れたかったんだ。何回も思いっきり入れて出したかったんだ」

「アア、……ミキオ君……」

俺は、母親の大振りの乳房にかぶりついていた。
新鮮だった。実家にいたときは殆ど毎日のように触れていた巨乳。それがいまはひどく新鮮に感じられる。

「ハア、ハア……ハア……」

乳首を吸っただけで、また反応があった。
母親も興奮からか敏感になっている。殆ど母性ではなく女そのものだった。

頭の中にナオコとの情事が蘇ってきた。
セフレとしての関係だが、母と同じ巨乳だったのが俺の気を引いた。

色気があるというよりも、エロイ感じの女だった。少し日本人離れしたしっかりした骨格のグラマラスボディは母親とは比べられない良さではあった。

だがそのナオコよりも俺は興奮している。
言葉では説明しようがないが、何ていうのか心地良い肉体だった。
それはナオコと違った官能をもたらしてくれる。

「アア、ハア～～～！」

俺はすぐ突き入れた。
奥まで力一杯突き入れていた。懐かしいような圧搾感が下半身を満たす。それがさらに奥へと突き入れさせることになる。

「イイ！」と俺は心の中で叫んでいた。
もっと奥へ促すように、母親の腕が俺の首の後ろに廻された。
強い力で抱きしめてくる。俺は腰を動きを大きく、そして力一杯に動かした。

「ウッ――ウヴヴ～～～！」

ズン！――というペニスの先端に当たる力強い手応え。
突き入れるたびに母親は大きく仰け反っていた。

「オウッ――アヴッ――！」

不思議だったのは、ナオコとの情事がフラッシュバックのように蘇ってきたことだ。一度に二人の女を抱いている気分になった。
大胆な行為が好きな女だった。いつも「もっと」と口走っていた。

ナオコには俺たちのことは話してある。
今日のことを知らせてやればどう思うだろう。いや、これを実際に見せればどう思うだろうと考えた。

多いときには週に四回はオナニーしてるというくらい性欲が強い女だから。母親との情事を聞きたがっていたし、話して聞かせてやると悦んでいた。

俺は母親の声が良いと話したことがある。
感じ出すと、一オクターブ高い声で喘ぐからだ。

その行為を実際に目にするとどう思うだろう。
息子の身体を心配して立ち寄った母親がする行為ではないのだから。

「アア～～、イイ～……」

そう思うとますます欲望が膨らんだ。
今までまったく思ったことがないが、二人の熟女を自分のものにできないか考えた。

まるでナオコに自分たち親子の情事を見せつけているかのような錯覚に陥って、激しさが増していった。母親との倒錯した関係に火を付けるような感じだった。

★ー続きは製品版でー★